

蟬の我慢

山田真砂年

山麓は水を豊かに青胡桃
子のこゑも動物園の暑さかな
炎昼やいつものハシビロコウである
破顔一笑西瓜の種を頬につけ
片蔭は蕎麦屋へ続く小諸かな
御所の衛士えじけふも空蟬拾ひけり
遊船や穴に入ると橋くぐる
蛇苺味も素つ気も無かりけり
潮満ちてきて流れ藻に抛る海月
航跡と同じ色して夏の雲
桃食うてべたべた甘き顎の下
眼前に蟬の我慢や鳴き止まず
草刈つて強き匂ひを踏みて立つ
落蟬にはや大胆や蟻たかる
凌霄の盛りは家を冥くして
青天白日待宵草の貧相なる
あちこちに悪口あくこう言ひて土用かな
研せし花火の中に四面楚歌
山鳩や残暑の村に鳴き止まず
台風の今びちやびちやと北上す
鯉の口に触れんばかりや赤とんぼ
螻蛄鳴くや祈りは土偶なりの形をして
今生を淡白に生き梨しやりしやり
雨雲のいよよ近づく真葛原
足許を風の擦り行く葛の花
会へば呑む友や凌霄咲かせをり